

〈左〉『鶴洲遊蹤』(文書館図書289才) 〈右〉「満洲旅行の栞」(昭和13年度版、一般郷土史料B350)

ツカウ・イカス ⑧

新世界への憧憬 into the New World

《遠くのまだ見ぬ世界》

近世のいわゆる鎖国体制下にあつては、もたらされる情報には限りがあったため、海の向こうに広がる世界は謎めいたものでした。各地に伝来する「漂流記」や「……譚」は、「未知の世界」へのあこがれや好奇心がもたらしたものと云えます。

アーネスト・サトウは「日本人は大の旅好き」と評しています。国内各地の様子を描いた「道中記」や「旅日記」も数多く今日に伝わります。

《「未知の世界」へのマナザシ》

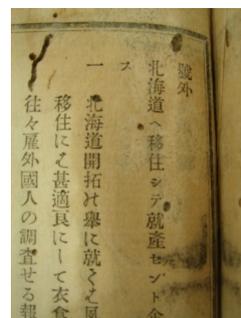
近代になると「情報量の増加」「伝達ツールの多様化」「メディアの発達」「交通網の整備」などの要因が、「未知の世界」との距離感を縮めました。やがて「未知の世界」は、勝者の価値観で「きりひらき、うつりすむ」、つまり拓殖の概念に彩られ、近代国家の対外的膨張を満たす「新世界」としての意味合いが色濃くなっていきます。

北海道・樺太・台湾・朝鮮・満州。各地の「風土・人情・産業・名所」を紹介したさまざまな報告が残されています。

しかし、時のうつろいととも、移り住むユートピアの分析をベースとする「見聞」「遊覧」報告から、いつしか、「豊穰」「雄大」「富源」のように将来的な支配のメリットをイメージした言葉で飾られた「下見」的な記録が目につくようになっていきます。「ツタエル」のニュアンスが大きく変化し、最終的には侵略制圧のステージを呼び込むことになってしまいます。

《北海道をツタエル》

明治初期の「勸業雑報」や新聞紙上には北海道の様子や移住者へのアドバイスが多数掲載されています。そして、北海道の様子を紹介した記録に一貫しているのは、気候は寒冷であるものの、「広大な大地」「産業の好適地」とのスローガンであり、移住者を誘うという基調が前面に漂っています。洪水や高潮などの自然災害の罹災者や困窮士族への対応の意味合いもありましたが、対ロシアという国防上の理由からも、北海道移住は急務とされ、北都旭川を拠点とした屯田兵による道内各地の定住開墾が推進されます。



『山口県勸業雑報』
第27号附録
(官省公報類477)

北海道移住希望者に向けた農商務卿西郷従道の明治16年(1883)4月25日付の諭達「北海道へ移住シテ就産セント企ツルモノハ左ノ事情ヲ斟酌折衷スヘキ肝要ナリトス」です。北海道での生活や開墾に関する注意事項が16箇条にわたって記されています。

同じ時期の「勸業雑報」や「防長新聞」にも移住地の景況が掲載されています。

ここで発揮された開拓スピリットは、半世紀の後、満蒙開拓の精神的な支柱として援用されることとなります。

《アジアをツタエル》

旅行者の土産話、現地居留者の生活体験談、調査団や視察団による各種報告書や演説などにより、アジア各地の状況はかなりの精度で国内に伝えられていました。

北海道へのアプローチには無限の可能性を秘めた原野を切り拓くという側面があったのに対して、アジアに関する報告からは、対外的膨張路線のレールの上を走り始めた日本の「行き着く先」を求めるニュアンスが色濃くにじみ出ていることに気がつきます。「商工事情」などには、現地での成功者のくらしぶりが美辞麗句にまとわれて紹介されています。絵葉書や旅行案内書にも、現地のありのままの姿に加えて、日本人の手により整備されたインフラや町並が取り上げられるようになります。描き出されたのは日本人にとってのユートピアであり、勝者・支配者・成功者の立場による侵略の向こうにしか見えないはずの世界でした。

《『鶴洲遊蹤』の世界観》

「北海道実情視察日乗」(大正12年)、「満鮮視察日乗」(大正9年)、「遼江日乗」(明治40年)、附録詩文集「南船詩草」の四編(収録順)で構成された『鶴洲遊蹤』は、尾中郁太による各地の視察報告です。昭和10年(1935)に尾中の古希を記念して刊行されたものです。尾中は、三田尻(中関)有数の塩田地主であり、多数の実業家を輩出した「泊園書院」(荻生徂徠を学祖とする大阪の私塾)に学び、帰県後は塩田貯蓄銀行取締役、県会議員をつとめています。十州塩田惣代人として国内塩業を牽引していた秋良貞臣に随行して、明治20年(1887)には、ウラジオストックや釜山に渡航。塩の販路拡張の交渉にあたり、海外の商都の活況を目の当たりにしています。中関村の華南図書館設立(明治37年)に寄与した文化人でもあり、「鶴洲」とは尾中の号です。『鶴洲遊蹤』は漢学の素養を下地とする紀行文ですが、あくまでも外地の実業視察報告書です。景勝地の紹介にとどまらず、ひとびとの気風、経済状況の現状報告、現地の将来展望にまで言及されています。

華南地域の経済状況を報告した「遼江日乗」のなかで、日清戦争戦勝国日本にとって「支那開発は天職」との使命感のもと、揚子江流域の経済的な有望ぶりを強調しています。開明的な実業家であったにせよ、そのよってたつところは覇権主義的です。この時期の日本政財界のアジア観が凝縮されたレポートなのです。

大正期の満鮮視察と北海道視察は県からの要請により編成された視察団による現地調査です。前者は中川望知事を団長として組織されたものです。また、「防長新

聞」「馬関毎日新聞」「防長実業新聞」がスポンサーの役割を果たしていたようで、紙面には逐次視察報告が掲載されています。視察の目的は、現地での産業振興への道筋をつけることにありました。視察団には当時の気鋭の政治家や県内各地の実業界の重鎮がその名を連ねていました。アジア情勢への嗅覚を持ち合わせていたであろう尾中以外にも、下関実業界の土井重吉(北海道で大関農場を営む)、経済誌「日本之関門」の主筆であった柳広一、山口県水産会の庄晋太郎などの顔ぶれです。

「満鮮視察日乗」の刊行にあたって、巻頭言を寄せたのは防長新聞主筆の野原秋草(祐三郎)。明治末年以来、「馬関毎日新聞」「防長実業新聞」「防長新聞」で勸業に関する提言を繰り返していた野原は、アジア振興に関する尾中の先見の明を絶賛しています。

地理的な要因も影響して、山口県人のアジアに対するまなざしは熱を帯びていたものと思われます。こうした指向は山口高等商業学校の東亜経済研究所(昭和11年設立、現山口大学東亜経済研究所)へと受け継がれることになります。

新世界をみつめた尾中の目線は鋭いものであったのかも知れませんが、そこに流れていたであろう優越感という名の先入観には注意を払う必要があるように思います。尾中の視点や分析結果には、僅かではあっても、南満洲鉄道株式会社の経営理念とも符合するものがあつたのではないのでしょうか。

発展や繁栄の様子に目を奪われがちですが、近代の海外の様子を伝えるさまざまな記録の理解には、大前提として、時代の雰囲気や覆われた記録する側の意図の把握が不可欠であると思われます。

写真：「尾中郁太古希記念写真」(『鶴洲遊蹤』より)

